

エー ジー ファイブ AG5 だより

補習授業校高等部の可能性

AG5 補習授業校チーム・海外子女教育振興財団 教育相談員 佐々 信行
ダラス補習授業校 講師 前田 耕



佐々 信行



前田 耕

アメリカで日本人の高校生が補習授業校に通う割合はそれほど高くありません。母語の確立のために日本語の環境がどうしても必要という年齢ではないし、ハイスクールの学習やスポーツその他の活動に多くの時間を使いたいのも分かりますから、やむを得ないとも言えるでしょう。しかし、補習授業校に通うことを選択した生徒たちは、自分なりに充実した学習を展開しています。補習授業校の高等部にはグローバル人材を育成する場として大きな可能性があります。

高等部はおもしろい

佐々 信行

◆高等部の科目設定

高校の「国語」の教科は多数の科目に分かれています。補習授業校でも「国語」「国語総合」「現代文」などいろいろな名前で授業が行われていますが、内容や進め方はそれぞれの学校の実情に応じて工夫されています。高校生は特に、卒業後の進学が大きなテーマになります。帰国生入試で日本の大学を目指す生徒たちを意識して、多くの補習授業校では「小論文」の授業を行っています。帰国する生徒が多い学校では数学などの理系の科目も設定して生徒のニーズに応えようとしています。中には英語の授業を実施しているところもあります。補習授業校が英語の授業を行うというのは意外な感じがしますが、日本人の先生に指導してもらうことで、日本人として英語を使いこなす力がつき、大学入試でも力を発揮できると考えれば納得がいきます。

アメリカでは補習授業校の国語の授業を「AP Japanese」としてハイスクールの単位に認めてもらっている事例もあります。一般のアメリカ人の生徒に比べると当然日本語の力は

優れているわけですから、それを成績に含めてもらえれば好都合ということになります。

◆高校卒業後の進路

補習授業校の高等部に通うのは帰国を前提とする生徒たちだけではありません。帰国の予定が当面なくてもこれまで苦労して学んだ日本語の力をさらに伸ばし、日本語の力をアメリカで強みとして生かしていきたいという生徒たちもいます。中には、アメリカで生まれ育った生徒が留学生のような立場で日本の大学で学びたいと考えているケースもあります。

日本の大学を目指す生徒とアメリカの大学に進もうとする生徒の割合は、補習授業校によって大きく違います。AG5プロジェクトで行った調査によれば、ある学校では日本の大学志望者が大多数ですが、アメリカの大学志望者が圧倒的に多いところもあれば、日本の大学志望者の方がわずかに上回るという状況の学校もあります。

◆得意な言語がちがっても

高校生の人数が多く、また先生も確保できれば、進路別にクラスを分けることも可能ですが、そのようなケースはむしろ特別です。普通は、

進学先の希望も日本語の力も異なる生徒たちが一つの教室で学ぶことになりません。ただ、「グローバル人材の育成」という視点で見ると、それが必ずしも不幸なこととは言えません。高校生ですから、日本語の方が得意な生徒と英語の方が得意な生徒が一つのテーマについて共に考え、日本語で議論することは可能です。英語の方が得意であればまず英語で意見をまとめ、それを日本語で発表できるように準備して授業に臨むことができます。これは、多くの日本人の生徒が現地の校の授業の準備をするのと同じことです。一方、日本語が

得意な生徒は、誤解を受けないよう分かりやすい日本語の表現を工夫する等、主張を理解してもらうよう努力することが求められます。どちらも、コミュニケーションの技能を高めることにつながります。補習授業校を「グローバル人材」を育てる場として考えるなら、高等部の可能性にも当然注目するべきでしょう。

◆「グローバル」の授業

ダラス補習授業校の高等部には「メディア時事」という科目があります。いわば「グローバル人材」としての力を育てることを科目名にしているユニークな授業です。参観さ

せていただいたことがあります。いわゆる「帰国組」の生徒も「永住組」の生徒も意欲的に発言し、活発な討論が行われていました。一人ひとりが他人とはちがった自分なりの考えを示していこうという姿勢が見られ、アメリカのハイスクールで鍛えられた力が発揮されているという感じを受けました。タイムリーな問題について考える学習であるということから、大学入試の際の小論文や面接に備えるという面でも、逆にアメリカの学校で日本人の視点を理解しながら考えを深めていくという面でも、得るところの多い授業だと思います。

このような授業が補習授業校の高等部で展開されているのはうれしいことです。

◆補習授業校を結んで

とは言え、単独の補習授業校で高等部の授業を整備していくのは大変です。補習授業校の先生を見つければどの学年でも容易ではないのですが、高校となると各科目の専門的な知識が要求されるので、さらに難しくなります。小さな補習授業校では、そもそも高校生的人数が少なく、クラスとして成立させることも危うくなります。

もし、いくつかの補習授業校が高

等部の充実のために力を合わせることでできれば、今までできなかったことが可能になるかもしれません。

幸いなことに、技術の進歩によって、離れた所にいながらコミュニケーションを図ることはずいぶん容易になりました。ダラス補習授業校ではシンシナティ補習授業校の協力を得て、両校の高等部の教室を結ぶ交流授業が実現しました。「高校野球の試合において、投手の連投を制限すべきか」という高校生が自分の問題として考えられるテーマでの討論では、自分自身や友だちの経験をふまえてしっかりした意見の発表が相次ぎました。いくらかの緊張感もあるなか、具体的なデータを準備して当日に臨むなど生徒たちには意欲的な姿勢が見られました。両校の接続に関して若干の技術的な問題はありましたが、保護者や借用校の学校区を含め各方面から応援をいただけてまずまずの状態での授業を行うことができました。

その後、両校の生徒がこのテーマで小論文を書きましたが、交流授業では活発に発言できなかった生徒も、討論の内容をふまえて自分の意見を展開していました。

これからの補習授業校間の協力に向けて一歩前進できたと思います。

ダラス補習授業校高等部の授業

前田 耕

私はダラス補習授業校（以下「ダラス」）で四年前から「メディア時事」という高校生向けの授業を担当しています。これは高校二・三年生を対象とした選択科目で、日本のニュースに多く触れることと、口頭での発表と討論の能力を伸ばすことを主目的にしています。ここでは、私の授業の紹介と、二〇一八年十月に行われたシンシナティ補習授業校（以下「シンシナティ」）との交流授業の様子をレポートします。

◆「メディア時事」の進め方

通常は、二週間（四校時）を使って、一つのテーマを扱います。テーマの選択は私が行います。原発再稼働、夫婦別姓、働き方改革、死刑廃止、TPP加入、沖縄基地移転問題、新安法制、外国人労働者受け入れ、など様々なテーマを取り上げてきました。なるべく時宜にかなった話題を扱うように心がけ、沖縄県知事選挙が行われている間には基地移転問題について、また日本のバラエティ番組での演出が黒人差別だとして

問題になったときはその件を取り上げたりしました。

テーマについての記事や論説を私が選んで授業に用います。その際、賛成・反対の両側からの意見がバランスよく混ざるように気をつけています。授業では、それらの記事を全員で読み、問題の背景や難しい言葉の意味などについての解説を挟みつつ、ときどき生徒にどう思うか問いかけます。誰かが意見を述べたら、それへの反論がないか尋ね、徐々に生徒間の議論に移行させます。そして、意見がある程度出たら次の記事を読んで再び考えるところで授業を進めていきます。自由に議論してもらうために私は個人的な意見は一切言いませんし、常に中立であるということや年度初めにはつきり宣言しています。議論を深めるために「〜という反論をされたらどう答える？」といった問いかけはしますが、それが個人の意見と同じとは限らないことを生徒達は理解しています。

二週間の最後には、賛成と反対の二チームに分かれて座り、ミニ討論会を行います。どちらの側に入るかは、生徒一人一人に自分で決めさせます。これについては、競技ディベートで行われているような、クジ引きで両派を分けるというやり方も可

能でしょうし、その方がいいだろうという意見もあるでしょう。しかし私としては、自分はどっちだろうと真剣に考えて欲しいので、このやり方を取っています。ただし、二チームに分けた際に人数が極端に偏ってしまったら、「自分の意見と逆の立場から主張する練習をしてみよう」と言って、一部の生徒を逆の陣営に移らせたりすることはあります。

チーム分けをしたあとは、討論開始までに十五分から二十分ほどの時間を与えて打ち合わせをさせます。慣れてくると、この時間内に生徒達の間で活発な意見の交換が行われるようになります。準備が終わったら両派から二人ずつの代表に出てもらい、順に主張と反論を行わせます。勝敗はつけませんが、私から最後にコメントとアドバイスをします。

生徒の人数は、日によって安定しませんが、八人から十五人ほどです。少ないと意見が活発に出ないし、逆に多過ぎると座っているだけの生徒が出てしまいます。この先、十五人を超えるようになったら、他の方法を考える必要があるかもしれません。

◆交流授業の試み

二〇一八年十月にAG5プロジェクトから支援を頂き、シンシナティ

との「交流授業」を行いました。二週連続で土曜日に両校の教室をビデオ通話で繋ぎました。一時間の時差があるため、シンシナティの六校時目とダラスの五校時目を使い、各回六十分ずつ行いました。

一二〇分という比較的短い時間で行うため、多くの説明を要するテーマは避けることにしました。選んだのは「高校野球の試合において、投手の連投を制限すべきか」です。二〇一八年夏の甲子園大会で準優勝したチームの投手が「投げ過ぎ」だったというニュースが話題になり、連投に規制を設けるべきかという議論がメディアで展開されていました。また、同じ高校生ということで生徒達には身近に感じられる話題だろう



シンシナティ補習授業校との交流授業

とも考えました。このテーマから日本社会に見られる「働き過ぎ」や「集団内での無言の圧力」、さらには「ブティック企業」などの問題にも言及していこうと計画して準備しました。

通信に使う機器の準備と設定などについては、補習授業校の教職員や運営委員にお世話になり、大変感謝しています。一回目の授業の冒頭では、両校の生徒一人一人に短い自己紹介をしてもらうことから始め、記事を読み始めました。生徒達は期待通り、スポーツの活動経験などに絡めた発言してくれました。日米でのスポーツ文化の違いを感じたことがあるかと問いかけると、そこからも面白い議論が生まれました。

二回目は生徒同士の議論を中心に行ったかったのですが、完全に自由にすると、うまくまとまらなかったり、時間よりも早く話が尽きたりしてしまう心配があったので、両校から二人ずつ、議論の柱になる生徒を出してもらいました。その四人には、一回目と二回目の間の一週間に短いスピーチの準備をしてもらいました。二人には連投制限を設けることに賛成の主張、あとの二人には反対の主張の準備をするよう頼みました。

二回目は、まず準備してきた四人に主張を述べてもらうことから始め、

生徒同士のディスカッションに進みました。途中、関連した話題として、その少し前に福岡で行われた全日本実業団女子駅伝で怪我をした選手が四つんばいでタスキを繋いだ件を紹介して写真を見せました。チームへの責任感から無理をしてしまうという点で高校野球の投げ過ぎと関連するのではないかという問いかけを行ったのですが、大いに盛り上がり、まだはいきませんでした。

生徒達は二回目になるとある程度の親近感を互いに感じていたように見えました。最後は互いに手を振りながら、交流授業を終了しました。ダラスの生徒たちに訊いたところ、「普段とは違うメンバーと話し合うのは新鮮だった」との感想が寄せられました。確かに、毎週同じメンバーでやっている、「誰々はいいつも右(左)寄りだ」など互いのことがよく分かってきます。全く知らない人とのやり取りは新鮮だったことでしょう。両校の生徒達がいい刺激を感じてくれたらとても嬉しいのです。今回の交流授業は、私にも楽しく貴重な経験になりました。今後、似たような試みを行う機会があるかどうかは分かりませんが、少なくともダラスでの今後の授業作りに今回の経験を生かしていきたいと思えます。